



奥田知志さん

記念講演 第19回糸賀一雄記念賞 受賞

2017.11.2

「生きづらさを抱える支援を考える」

おくだともし

奥田 知志（認定NPO法人抱樸理事長）

滋賀県生まれ。1990年にホームレス支援団体・北九州越冬実行委員会 事務局長に就任する。また同年、日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会牧師に就任。2000年には、NPO法人北九州ホームレス支援機構が発足し、理事長に就任。（その後、2014年7月NPO法人抱樸と名称を変更）。2014年には一般社団法人 生活困窮者自立支援全国ネットワーク代表理事。現在、法人の活動はホームレス支援に留まらず、生活困窮・孤立者支援事業、介護福祉事業、障害福祉事業、地域生活定着支援事業、子供・家族まるごと支援事業など、多岐に渡る活動となっており、その活動のリーダーとして活躍している。著書に『もうひとりにさせない』（いのちのことば社）、『「助けて」と言える国へ』（共著 集英社）など。

今回、糸賀一雄先生の賞をいただくことになり本当に恐縮し、感謝しております。「この子らを世の光に」は、私たち困窮者支援の現場においても重要な指摘だと思っています。一九八八年十二月の活動が始まり三〇年になります。今後の在り方を考えていく上で、今回の受賞は、これまでの活動に対する評価ではなく、今後への期待であると考え、何をすべきなのかを糸賀先生の残された思想を考えつつ模索したいと思います。

NPO 法人抱撲

当初、路上で暮らさざるを得ない「野宿状態の方々への支援」から始まりました。ひとりの人と出会い、その人に伴走しながら共に考え、悩み、笑い、共に生きていく。そして最期を看取る。「出会った責任」を真面目に考えてきました。その日々は「支援」と言うより「共に生きるステージ」だったように思います。

路上生活からの脱出は大事な事柄です。しかし、実はその後の生活がその何倍も大事であり、「大変」でありました。地域の中で、他者と共に生き、生活が継続できること。「何気ない日々」を取り戻し、継続できるかは、本人の課題もさることながら、社会的排除が横行する地域において

は大変な事柄でした。私たちは、「自立支援」を起点にしつつ「人生支援」を掲げてやって来ました。人生とは、「その人がその人として暮らしていく」という言わば当たり前で普通の事です。しかし、それを失った人、奪われた人は案外多く存在している。それが今日の社会であると思います。

年に一度、自立した人々を中心に運動会を開催します。「ゴーイングホームデイ」と銘打ったこの企画はすでに十年続いています。三〇〇名余が集う「元ホームレスの運動会」は、世界的にも稀だと思えますが、私にとってこれは「奇跡だ」と思える一日となっています。なぜならば、どの方も、あの日出会ってなかったら路上で亡くなっていただろうと思われる人で、そんな方々が笑顔で一日を過ごされる。私たちにあって、それはとっても良い一日です。

昨今は、さらに面白い、と言うと語弊があるかも知れませんが、「興味深いこと」になっています。四年前から抱撲では、「子どものための世帯支援」をやっています。この子どもたちや親御さんが運動会に参加します。多くの子どもは、そもそも学校に行っていない子どもたちですから、当然運動会にも出たことがありません。初めて参加する運動会がNPOの「ゴーイングホームデイ」と言うことになります。周りは、元ホームレスのおじさん、おじいさ

んばかりですから、子どもたちは引つ張りだこ状態でどの子もスターになれます。そして、初めて出た運動会で一等賞が取れる。学校の運動会なら、こうはいかない。

それぞれ弱みを持つている者同士が、集まって一緒に何かをやるうとすることは、とつてもいいことです。年を取って走れない元ホームレスのおじさんたち、学校にいけない子どもたち、それぞれがキチンと役割を果たしている。共生社会と言うのは、そういう事だと思います。強いものや優れたものが集まったら、より良い共生社会が生まれるというわけにはいきません。弱い者同士、困難を抱える人同士が集まって、弱さを前提に社会を創造すると新しい世界が生まれる。共生とは、そういうことのようなものだと思えます。

先に申しましたように八〇年代後半に私たちの活動は始まりました。日本も世界も八〇年代半ばあたりからずいぶんと問題を抱えるようになり、生きづらくなつたように思えます。みんなが幸せならば、私たちのようなNPOは不要でした。

活動開始三〇年を迎えますが、少々戸惑っています。普通ならば、「周年行事でお祝い」という事になるでしょう。しかし、私たちみたいな困窮者支援団体が三〇年間も忙しくしている、いや、それどころか年々活動が広がって

いるというのは、果たして良いことなのか。「三〇周年おめでとう」と、単純に言えないのが、問題解決型NPOは宿命だと言えます。がんばって自分たちの必要性を無化していく、そんな矛盾した宿命を私たちは担ってきました。だから十八年前、NPO法人の設立総会において、私は理事長として「一日も早い解散を目指し、今から頑張ります」と挨拶したことを覚えています。

しかし、残念ながら活動開始二五年を過ぎた時二〇一三年、「これはもう解散できない」ことを宣言し、名前を「抱樸（ほうぼく）」に変えました。現在の困窮や貧困は、単に「景気が良い、悪い」と言ったことではなく、経済、雇用、社会保障など構造そのものが崩壊した結果だと思えます。すなわち、貧困や格差は、イレギュラーな事象ではなく、すでに常態化していると言えます。「取り戻そう」と政治家は威勢よく言いますが、「もはや戻することはできない」というのが、現実です。だから、解散出来ない。

これまでに路上から自立された方は三〇〇〇人を越えました。半年間の自立プログラムを経ての自立達成率は九三%。就労自立率は五八%です。一方で知的障がいや依存症が多いですが精神障がいの方を合わせると四〇%と越えます。また、地域での生活が継続することが何よりも大切です。どうやって再ホームレス化を防ぐかに取り組んできました。

地域での生活継続率も九〇%を越えています。四つの市で活動し、生活サポートをしている方は二〇〇〇名。「出会った責任」ということをある意味真面目に考えてきたのですが、その人の必要に応じて支援の仕組みを作ってきた結果、NPO法人 抱樸には十七の部署が存在し、有給スタッフは一〇〇名を越えました。ボランティアの登録をしている方は一五〇〇名。五年前から、「助ける―助けられる」の関係の固定化を乗り越えるために「互助会」を発足させました。毎月五〇〇円の会費を払う互助会には現在二七〇名が加入。そのうち当事者（野宿からの自立者）が一五〇名です。互助会は、バス旅行やお見舞いボランティア、サロン活動など日常活動も行いますが、何よりも大切な働きは「葬儀」です。ホームレス者の場合、路上で亡くなるのと八割が無縁仏になります。自立してからでも家族が葬式を担うのは半数に留まります。ですから、互助会葬は必要であり、重要な働きとなります。葬儀はこれまで家族機能の中心であり、冠婚葬祭は基本的に家族の役割とされてきました。しかし、ホームレス状態にある人々に象徴される「無縁化」した現代社会においては、誰が葬式を担うのかは重要なテーマとなります。共生社会というか、良い社会とは、赤の他人が葬式を出し合う社会だと考えています。

「原木のまま一旦抱きとめよう」

活動開始二五年を期して、二〇一三年に団体名称を「北九州ホームレス支援機構」から、「抱樸（ほうぼく）」に変えました。問題提起、問題解決型の活動のみならず、どのような社会を目指すのか、どのような生き方を目指すのかについて、私たちが何を考えているのかを明示するために「抱樸」と名乗ることにしました。つまり、私たちが目指すのは「抱樸する社会」であり、「抱樸という生き方」です。

最初にお話しをしたのは、「抱樸」ということです。抱樸する社会とは「助けて」と言える社会です。「抱樸」は、抱く（いだく）っていう字と、樸は山から伐りだされたままの原木、つまり荒木という意味です。「抱樸」は、「原木のまま抱く」という事です。元々は老子の言葉です。「そのまま抱く」ということが、なかなか出来ない社会になっています。この国の社会保障の仕組みにしても「申請」が前提になっています。「申請主義」です。「申請してきたら受付けます」と言っても、実は困った人ほど「助けて」が言えません。「なぜ、もっと早く相談しなかったの」って言うだけけれど、相談に来ない人を困窮者と言います。ですから、こちらから出かけて行くことが大切です。「出

会う」というのは、「出て行って、会う」ことを意味しています。そして、あれこれ条件を付けないで、そのまま抱き合う。「山から伐りだされた原木が、製材所に運ばれてキッチンと整ったら受け入れます」なんてやっていたら手遅れになる。「そのままおいで」「そのまま出会う」、つまり、原木を抱くのです。

そして、そんな風に出会う中で、原木は、いつしか自分の使命というか、役割を見出していく。机になったり、杖になったり、楽器に成ったりします。当然、専門家が勝手に決めることはできません。パターンリズム（父権主義）は、論外です。しかし、困窮が深刻なほど当事者の自己決定と言うことも困難なことが多い。「当事者主体」と言うことは、何よりも大事です。しかし、困窮孤立状態にある人に「あなた何したいんですか」って尋ねることは、実は結構ハードルが高い。当事者は、質問の圧力の中で、思いがけないこと言ってしまう。すると「本人が望んだのだから」と的外れな支援が始まってしまいます。これは、形を変えた「自己責任論」とも言えます。「抱撲」は、支援における「時間の概念」を重視します。答えは、支援者の中にも、あるいは当事者の中にもないのではないか。最終決定は当事者が当然するのですが、「答えは間にある」と考えてきました。それが解るまでゆっくり伴走し

つつ「時を待つ」ことが重要でした。

さらに、原木は少々荒々しかったり、とげとげしかったりします。そのまま抱くということは、「傷が伴う」ことになりません。人が人と出会うと多少なりとも傷つきます。これが嫌で社会は無縁化していきました。「自己責任」や「身内の責任」が強調されてきましたが、それは責任を本人や一部の人に限定することを意味しました。結果、社会は脆弱になりました。なぜならば、自己責任の強調は、結局、周囲の人が関わらない理由であり、社会の責任を無化した言葉だと言えます。そうではなく、人と人が絆を結ぶということ、傷つくことを内包しています。「絆は傷を含む」と考えています。特に今まで自己責任とか身内の責任とか一定の人たちに責任をくくって、その人たちに限定して責任を負わせるという時代が今もつばらになっていきますけれども、そうではなくて、本来社会というのは、より多くの人が健全に傷つくための仕組み。一定の人に傷を負わせるとですね、もう二度と立ち上がれないぐらい傷ついてしまうので、健全な傷ついているのは大事なんじゃないかって思っています。

「ハウスレス」と「ホームレス」

ホームレス支援、あるいは困窮者支援の現場において「困窮」というものをどのように捉えるかは、大切な事柄です。従来、困窮支援において「経済的貧困」が問題の中心であり、結果「就労支援」が支援の中核でありました。私たちは、困窮概念を二つの困窮、すなわち「経済的貧困」と「社会的孤立」で捉えてきました。これは、二〇一五年にスタートした「生活困窮者自立支援法」の基本的理念にもなった考え方です。三〇年前、私たちは、「野宿からの脱出」に取り組み始めました。まずはアパートの設定です。現住所が無い人がアパートに入居するということは、それだけでもなかなか大変でした。住所がない人ばかりなので、当初は、不動産屋さん「全員が私の教会のメンバーで長期入院の結果住所を無くした」などと嘘ばかりついていました。炊き出しから始まり、衣服の提供、アパートの設定、就労支援とやっていくわけです。

アパート入居後も関係は続きます。訪ねると、野宿時代とは隔世の感があります。お風呂にも入り、食事もできています。就職も決まりました。「良かったですね」と声を掛けると、ぼつんと一人座ってらっしゃる姿が見られる。このぼつんと一人座っている姿が、野宿時代に駅の通路でダンボールをひいて一人ぼつんと座っていた日の姿と変わらな

い。一体何が解決できて、何が解決できていないのかが問われました。路上の時には、「畳の上で死にたい」と仰る。アパートに入り、畳の上に暮らすんですが「良かった、良かった」とはいかない。次に仰るのは「俺の最後は誰が看取ってくれるだろうか」という事になります。つまり、畳と言う物の問題から、明らかに人の問題になっていく。

私たちは、「ハウス」と「ホーム」は違うという事に気づかされました。「ハウス」は、家に象徴される「経済的」あるいは「物理的」問題。だから、炊き出しから、居住、就労と支援をしていく。でも、もうひとつの問題は、「誰が看取ってくれるか」という人の問題。これを「ホーム」の問題と認識しました。「ハウスレス」という経済的貧困状態と「ホームレス」という社会的孤立状態。路上の人々は、この二つの困窮を同時に抱えていたわけです。

ハウスレス状態に対しては、生活保護や就労、アパート入居、多重債務状態の方が多かったのですが、弁護士等の法的手続きなど「何が必要か」を考えてきました。

一方で、この人には「誰が必要か」が大きな課題となりました。「何が」という問いと、「誰が」という問い。私たちの三〇年は、ある意味、この二つの問いに同時に応える仕組みを創ってきたと言えます。昨今、課題となっている居住の問題も、「安全な住宅の確保」のみで考えてもダメ

で、同時に「暮らしの安全」がどう確保されるかが問われるわけです。ハウスとホーム、経済的課題と関係性の課題、これらを一体的に捉えないと本当の課題はわかりません。

しかし、この課題を最初に私に指摘してくださったのは、実はホームレスのおじさんでした。もう三〇年近く前のことですが、夜中に中学生がホームレスを襲撃していました。ひどい襲撃で、被害者のおじさんは「なんとかしてくれ」と私のところに相談に來られました。「怖くて眠れない」と仰るその方が、しかし、最後言われた言葉に衝撃を受けました。「考えてみたら夜中の一時や二時にホームレスを襲いに來ている中学生は、家があつても帰るところがないんじゃないか。親はいても、誰からも心配されてないんじゃないか。帰るところのない人の気持ち、誰からも心配されていない人の気持ちは、俺はホームレスだから分かるけどな。」私は、その言葉を聞いて、そうか、中学生とホームレスは全然違うと思つていたけれども、どちらもホームを失っている。中学生は家に住んでいる。おじさんは外で寝てる。しかし、中学生は家があつても帰るところはない、家族はいても誰からも心配されていない、となればこれはホームを失っている、つまり、ハウスレスではないけれどもホームレスなんだと考えるようになりました。すべては、路上の人々から教えてもらったわけです。

縁の切れ目が金の切れ目

ハウスレスとホームレスを同時に解決することを目指し活動が本格化していきました。これまでにアパートに入居された方は三〇〇〇人を超えました。

多くの人々と出会う中で、この二つの困窮が相互に影響を及ぼしている事実を知りました。いわゆる連鎖というか、スパイラルを起している。今日、貧困のスパイラルという生活保護の世代間連鎖のことを言いますが、私は経済的貧困と社会的孤立の連鎖が問題だと考えています。

最初のスパイラルは、経済的貧困が社会的孤立を生み出すということです。例えば北九州市の高校進学率を見ると一般世帯に比べて生活保護世帯の場合、一〇パーセント落ちます。明らかに経済的貧困が高校進学という社会的な参加を狭めているわけです。あるいは、男性サラリーマン（給与所得者）の場合、正規雇用の男性の平均年収に比べ、非正規雇用の男性の平均年収は、半分以上に落ちます。さらに、正規雇用の三〇歳の男性が結婚している率が五七パーセントであるのに対して、非正規雇用の三〇歳の男性の既婚率は二四・九パーセントに留まります。正規、非正規で実は給料の格差は二〇〇万円以上あります。明らかにこの経済格差が、結婚という社会関係構築に支障をきたしている

るのは、事実です。すなわち、金の切れ目は縁の切れ目というところですよ。

もう一方で、逆もまた真なりです。つまり、縁の切れ目が金の切れ目ということですよ。端的に言って「人は何のために働くのか」という事に関連します。お金のため、食べるためだと言います。しかし、本当にそうでしょうか？確かに、最終的には仕事がなくなって野宿化するんですけど、でも、だいたいその前に家族が崩壊している人が少なくない。問題は、すなわち「何のために働くか」ではなくて、「誰のために働くか」だと思います。この「誰」が不在になると働く意味を見失うことになり、最終的に経済的貧困に見舞われます。

NPO法人 抱樸では、元ホームレスだった方々の一座を結成し、全国各地の学校その他で公演しています。生笑（いきわら）一座と言います。これは、「生きてさえいればいつか笑える日が来る一座」です。中心メンバーの西原さんは、十一年間野宿をしていました。ある時、小学生が西原さんに質問しました。「おじさん何でホームレスになったの？」。そうすると西原さんは、最初は「仕事が出来なくなつて」と言っていたんですが、その後、「実は、今から四〇年ほど前。結婚して子どもが産まれて、子どもが二歳になつたところ、ある時、奥さんが『おとうちゃんタバコ

買いに行つて来るわ』って夕方家を出ただけど、あれから四〇年、帰つてこないんだよな。母ちゃんどこまでタバコ買いに行つたのかな」って小学生に言うんです。西原さんは、連れ合いに捨てられたわけですよ。それで子どもと実家に戻る。お祖母ちゃんが孫の面倒を見て、西原さんは、トラックの運転手しながら家族を養うわけですよ。しかし、子どもが十七歳になつた頃、お祖母ちゃんが亡くなり、ついに息子も家を出て行つた。その時西原さんは、「もうどうでも良い」と思つたと言います。「おじさんは、かっこいい言い方だけでも、家族を養つていたって思つていたんだ。でも誰もいなくなつた日、もうどうでもいいやつて思つたら、生活はめちゃくちゃになり、気が付けば野宿になつていた」と仰つた。

離婚や家族との別れが野宿のきっかけになつた人は、多くいます。つまり、縁の切れ目が金の切れ目になるわけですよ。お金がなくなると社会参加ができなくなる。つまり、経済的貧困が社会的孤立を生む。しかし、また社会的孤立が経済的貧困を生む。両者はスパイラル状態を生み出すと思います。私は、現代の困窮は、そんな風に起こつていくと思ひます。

「食べるために働く」と言いますが、そうでしょうか。野宿のおじさんたちは、色んなところで残飯をあさつて食

べています。そして、東京のホームレスも、大阪のホームレスも、九州も、自分たちの食物を「エサ」と呼びます。「人間の食べ物だからエサって言わないで」と私が行っても「いや、エサだ。残飯をあさっているから犬や猫と一緒にだ」と言われてしまう。でも、私たちの炊き出しの場所で、手渡した物について「これは何？」って尋ねたら、「これはお弁当」と答えられる。エサと弁当を使い分けおられるわけです。「食べ物」、つまり「物」だったら両者の差はありません。むしろ、ボランティアが作った弁当よりも、コンビニが破棄した弁当の方が豪華だったりします。悔しいけれども。しかし、私たちが配ったものは、「エサ」ではなく「お弁当」になります。何が違うのか。私は、こう思います。「物」に人が関わることで「物が物語化」していくのだと。この物語化の支援は、伴走支援の基本的な考え方です。

地域づくりという時も同じで、仕組みや事業、地理の問題ではなく、どれだけ物語が生まれるかにかかっていると思います。「物」の支援では何も変わらない。「物に人が関わる」ことによって物語が生まれるが、そこが勝負です。

伴走そのものが目的

活動当初から経済的貧困に加え、社会的孤立の問題を考えてきましたので、「伴走支援」という支援論は、私たちの支援の中核になりました。そんな中「やはりこれだ」と決定づけた事件があります。二〇〇〇年五月に起きた佐賀でのバスジャック事件です。「西鉄バスジャック事件」と呼ばれるものです。

十七歳の男の子が佐賀の国立の精神科に入院していた。その子が、五月の連休に一時帰宅が認められ、福岡に向かいます。しかし、彼は発車後、「お前たちの行先は天神（福岡）ではない。地獄だ」と言いバスジャックに及びます。一人を殺害し、数名が負傷しました。この事件の後、朝日新聞がこの事件の特集を組み、その中にこの子の母親が事件前にある大学教授に書いた手紙が公開されました。少し、長いですが紹介します。

「いじめが原因で中学三年の夏頃より荒れ始め、まるつきり違う人格のようになり、家庭内暴力になって、何か違う方向へ行く危険性もあり不安でした。親が気づいても病院の受診がない、診療したことがないからなど断られる。医師、児童相談所、教育センター、教育相談所など、いろいろ回りましたが、動いてくださる先生は一人もいらっしゃらない。入院して二〇日あまり。まじめでおりこうさんを装っているとのこと。何を考えているのか、大きな不

安に包まれています。入院当日の、『おぼえていろよ、夕
 ダではおかないからな』という言葉が忘れられません。心
 が開けない状態で退院となれば、今まで以上に暴力がひど
 くなるのではと不安です。心の闇がもっと広がるような気
 もします。このまま自分を封じ込めた闇の中で一生を終
 わってほしくありません。しかし、一筋縄ではいかない強
 さももっていて、繊細で、敏感で、私たちの行動を見抜い
 て動いているようなところもあります。入院先の先生にお
 任せするしかありませんが、退院後の不安が強すぎて力が
 わいてこないです。」

深刻な手紙です。そして、この母親の不安は、その後の
 中しました。私はこの手紙を読んだ時、「これは僕あての
 手紙だ」と思いました。特に、心に残ったのは、「いろんな
 ところを回りましたが、動いてくださる先生は一人もい
 らっしゃらない」というところ。ただ、この言葉には、違
 和感もありました。私自身、子どもの不登校を経験してい
 ますが、その時のことを思い起こすとこの部分がひつか
 かる。この母親が率直に求めていたものは何か。それは、
 子どもが元気に回復することだったと思います。だから、
 母親はそもそも「治してくださる先生」を求めていたは
 ずです。だから国立の精神科にも入院させた。にも拘わら
 ず、この母親は、「動いてくださる先生」と書いているわ

けです。この事態を收拾し、病んでいる息子を治してくれ
 る医者はいないか、薬はないのか、渦中にいた母親は、本
 来そう思っていたと思います。しかし、「一筋縄ではいか
 ない」現実も知っていた。いや、それが現実だった。だか
 ら、彼女は、「治してくださる先生」ではなく、「動いてく
 くださる先生」と書いたのだと思いました。

もし、「治してくださる先生」と書かれていたら、僕は
 「私には関係ない」と思ったと思います。何故か。私は、医
 者さんや心理の専門家ではない。だから、「治すこと」は
 難しい。でも、この母親が「動いてくれる人」を捜してい
 るというならば、「それぐらいならできる」と思えたわけ
 です。ともかく、一緒に動いてくれる人、一緒に泣いてく
 れる人、一緒に笑ってくれる人が必要。問題は解決しな
 いかもしれないが、ともかく一緒にあって右往左往してく
 れる人がいたら何とかなると言った正直な思いがそこに
 あったと思うのです。こういう苦しみ、特に不登校など子
 どもの事などは、今まで社会は、家族、身内にすべて負わ
 せてきたと思います。いや、それどころか貧困などの問題
 も自己責任だと言ってきた社会にあって、伴走する人は不
 在化していききました。無縁社会となったわけです。私たち
 は、問題解決も大事ですが、それ以上に人を孤立させない
 こと、伴走支援が必要だと考えたわけです。でも、やって

みるとこれ自体容易ではありませんでした。

私は、現在、厚生労働省の生活困窮者自立支援制度を担当する社会保障審議会の部会のメンバーですが、その場で「相談事業とは何か」という議論がしばしば起こります。生活困窮者自立支援制度が目指す相談支援は、「断らない相談」だと、今回の答申に明記されることになりました。縦割りの制度の現実、制度の隙間に落ちる人を生み出しました。だから、「誰も漏らさない」相談の窓口が必要だと私も主張してきました。

しかし、「断らない相談」に対して、「相談を受けるのはいいけれども、出口（問題解決の手段）がないと相談を受けられない」、「就職先など確保しないまま相談を受け続けると相談員がバーンアウトする」という危惧の声が審議会でも上がりました。これもまた、重要な視点です。特に生活困窮者自立支援法は、給付の無い制度なので、どれだけ社会資源とつながるかが勝負になります。

しかし、私はこの意見に、従来の相談支援の意味、あるいは支援論の本質が「問題解決」に特化されてきた現実を見ます。私はそれだけではないと思っています。問題解決は当然大事です。しかし、「一筋縄でいかない」あるいは「治してくださる先生」という出口がない場合が結構あります。そんな時でも、解決出来そうもないから相談を受け

付けないというわけには行かない。

伴走支援では、相談には二つの機能があると考えます。「問題解決」と「相談自体」です。問題解決に集中するあまり、「相談自体」の意味を見失いつつあります。「相談自体」、すなわちその人と伴走すること、その関係そのものが、実は支援であり、その目的なのです。

私たちの考えて来た「伴走支援」は、「伴走」が目的である支援です。就労支援というと就職が目的なんですけれども、伴走支援というと伴走が目的です。今回、就労支援が上手くいっても、現在、非正規雇用が四割を超える現状において、二〜三年後に第二の危機、第三の危機が起こる場合が少なくない。その時に、誰に助けると言えるかが勝負になります。その「誰に」を確保することが伴走支援です。

「人は変わらなくても生きる」

最後に、私たちが構築してきた「伴走支援」は問題解決に特化してきた従来の支援論ではなく、「関係そのもの」に着目した支援論ですから、だからこそ、その根本は普遍的価値になればなりません。すなわち「いのち」そのものです。

「いのち」が分断される時代となりました。二〇一六年

七月の相模原での事件は、「生きる意味のあるいのち」と「生きる意味のないいのち」という、あつてはならない分断線が引かれた事件でした。抱樸の伴走支援は、「いのちに意味がある」と、当たり前のことを言うことから始まります。残念ながらこの「当たり前」が当たり前で無くなりつつあります。

三〇年前。活動が始まった頃、「ホームレスを支援しても自立するはずがない」と言われていました。しかし、これが結構上手くいった。九割以上が自立される。私たちは、あることを確認しました。つまり、「人はいつか変わる」ということです。人は出会いによって変わるということを私たちは繰り返し確認しました。多くの人が自立していきましました。すると私たちの中に、「出会って変わっていく良いホームレス」と「何回言っても変わらない悪いホームレス」という分断線が引かれるようになりました。困窮者支援のNPO自身が、です。これが事実です。そうするとスタッフは「変わってくれそうな人のところにしか行かない」ようになります。結果、自立達成率は九八パーセントまでになりました。母数を調整している訳ですから挑戦です。出口というか、結果が出る人しか行かない、難しい人には最初から行かないわけですから、そうなります。いわゆるクリームスキミングをしたわけです。

しかし、これはダメだということでは会議を開きました。そして、もう一つのテーマ「人は変わらなくても生きる」が与えられた。「人は変わらなくても生きる」とまず言い切った上で、「人はいつか変わる」ことを信じる。この二つのテーマに身を割かれること。それが伴走支援でした。

先日、ある講演会でのことですが、一番前の席に見るからに「しんどそう」な女性が座っておられました。何か相談があるのかなと思っていました。質問の時間に彼女が手を挙げられました。そして、「奥田さん、生きる意味って何ですか」と質問されたことがありました。正直、「困ったな」と思いながら、でも、答えないと大変なことになりそうでしたから、考えて「生きる意味っていうのは、色んな人との出会いの中で見出すものだと思います。今日あなたは、相当辛そうですが、よく勇気を出してこの会場にいられたと思います。生きる意味は、部屋で一人ぼっちで考えていてもわからないと思います。色んな人との出会いの中で気づくものだと思います。そういう他者性を介して、自分が生きていく意味を知ると思います……。」と答えたのですが、でも、これではまずいと思いました。

今の答え自体は事実で、私はそう考えているのですが、そうじゃなくて「生きる意味」を問う前に言わなければならぬ言葉があると思うのです。つまり、「生きる事に意

味がある」とまず言う。そして、次に「じゃあ生きる意味ってなんですか」と問う。その方にも「今、言ったことは事実ですが、生きる意味って何かは、第二の言葉に過ぎません。それを言う前に第一の言葉、つまり、生きる事の意味があるという、第一の言葉をまず言ってください。」と申し上げました。現在の社会は、この第一の言葉をないがしろにしているように思います。無前提に「生きる意味って何んですか」と言う問いから始めるのは、大変危険だと思えます。なぜならば、いくら他者との関係の中で考えても問いの答えが見つかるとは限らない。だったら「死にます」となりかねない。相模原事件は、「生きる意味のあるいのち」と「無いいのち」を分断しようとしたわけですが、しかし、「いのちに意味がある」とまず言い切るこ

とが重要です。

この第一の事柄と第二の事柄の混乱は、「いのち」に限らず、随所で見受けられます。「自立支援」の議論においても、自立は実は第二の事柄です。第一の事柄、つまり、「生きている」という普遍的な価値を認識せず、一気に第二の事柄である「どうすれば自立できるか」が議論されているように思います。何か大きなものが抜け落ちていく。

私は、映画『男はつらいよ』が好きで、DVDを全巻もっています。第三九作『寅次郎物語』のラストシーンで

甥っ子の満男がおじさんに尋ねます。「おじさん、人間は、何のために生きてんのかなあ」と。すると寅さんが「そんな難しいこと聞くなよ。」っていいながら「あのな、生きてたらな、あー生まれてきて良かったという日が時々あるだろう。その日のために生きてるんじゃないやねえの」という訳です。寅さんのこの答えはとても良い。「生きてたら」が前提になっているからです。「生きてさえいたら」という寅さんの答えの前提は第一の事柄であり、そして、「時々ある」という第二の事柄がつい来る。

糸賀先生のごことは深く学んでおりませんので、何も言えないのですが、「発達保障」と言う考え方は、生きることを前提に、本人だけでなく、発達を社会化して捉えておられるように思います。糸賀先生が指摘された「発達」や「成長」を「保障」することは重要です。困窮者支援においても「自立支援」が現象的には中心的な事柄に見えます。しかし、それ以前に「いのち」が揺るがなくなるわけです。糸賀先生も当然その前提は「いのち」という普遍的価値を前提した上で「発達」の議論をされたと思います。そこに私は、第一の事柄と第二の事柄の緊張感を見た思いがします。

最後になりました。この度の賞は、本当にありがとうございます。今後もこの賞に恥じないような活動を続けていきたいと思えます。私のお話しは以上です。